

# 信州読書会 ツイキャス読書会

## 課題図書 ヘルマン・ヘッセ 『車輪の下』

信州読書会では、毎週、ツイキャスをつかった視聴者参加型の読書会を開催しています。

信州読書会のメルマガ登録者は、課題図書の読書感想文を 800 字で書いていただければ、放送中に紹介します。  
(募集要項はメルマガでお伝えします)

また作品に関する質問・感想などは、どなた様も、放送中ツイートいただければ、とりあげます

信州読書会 ツイキャス <http://twitcasting.tv/skypebookclub>

『信州読書会』メルマガ登録はこちらから [http://bookclub.tokyo/?page\\_id=714](http://bookclub.tokyo/?page_id=714)

今後のツイキャス読書会の予定です。 [http://bookclub.tokyo/?page\\_id=2343](http://bookclub.tokyo/?page_id=2343)

『ツイキャス読書会』音声のバックナンバーです。

<https://www.youtube.com/playlist?list=PLVj9jYKvinCsgP7jtFgzqxea6cgqd7mrf>

(各回の感想文は動画の下の説明欄に PDF へのリンクを張っております。)



第 70 回のツイキャス読書会の課題図書は、ヘルマン・ヘッセ 『車輪の下』です。

読書感想文を提出して下さった皆さんありがとうございます。

## 『車輪の下』感想文

私は今回の課題図書を考察していくにあたって、テキスト論の「作者の死」を採用せずに、三島先生の「作者と作品の関係性」を利用していきます。三島先生は作品が作者を復活させるためのものだと言明しており、例えばゲーテの「若きウェルテルの悩み」についてはゲーテがウェルテルを殺すことによって自信を復活させているのだと唱えていました。故にヘルマン・ヘッセはハンスを殺すことによって自信を復活させていると私は考えます。しかしながら、この定義でいきますと、太宰先生を否定することになりますので、その非礼をお許しください。

谷崎潤一郎先生の「神童」をオーバーラップしながら読ませていただきました。やはり、神童は高慢に繋がると断定はできませんが、高慢と密接に関わっていると私は考えています。

三島先生を沢山引用しますが、彼は道徳的孤立が人間の最も苦しい状況であると仰っていました。ハンスは高慢だから虐められたのか、それとも道徳的孤立が故にはぐれ者になってしまったのか、私にはわかりません。その道徳的孤立を解消させるためにゲーテ風に言えば自由死をしてしまったのか、それとも失恋による絶望から自分を救うために自由死をしたのかと言えば、私は前者があった上で後者を採用します。

「失恋万歳」と掲げる武者小路実篤先生を引用をさせていただきます。彼は失恋を「母親が子供を失うほどに苦しいものだ」と仰っていました。失恋をすると、本物の愛を求めようになり、道楽をしても、再び恋愛をしても空いた穴は埋まらずに、永遠の愛を求めようになる。それが宗教的な愛である。失恋をすると人は強くなると武者小路実篤先生は生涯仰っていました。これは私の主観でありまして、雑にヘルマン・ヘッセの『車輪の下』をディティールに読んだのですが、「失恋は物凄い力を持っている」と感じましたが、大学生の私にはわかりません。皆さまと共有出来たらと思いまして、書かせていただきました。以上です。

(おわり)

## 『車輪の下』感想文

控えめで聡明なハンスの人生が崩れていく話を読んでいて、とにかく辛い気持ちになった。

ハンスは周囲の人達の期待に応えようと努力するが、他人は自分の都合のいいことを押し付けてばかりだ。

しかし、素直な心を持ったハンスはすべての人の期待に応えようとしてしまう。

ハンスには よい成績を修めるとい唯一の堅い決心があった。しかし、ヒンディガーの死をきっかけに、良心がずんでいることが何よりも大切だと気づき、ハンスは決心を捨ててしまう。

そして、ハンスは成績よりもハイルナーとの友情を選ぶが、その友情は気まぐれに終わってしまう。

ハイルナーは天才的な感性を持っているが、自分のことしか考えていない。一方的に自分の感情をハンスに押し付けるが、友人のハンスの成績が落ち神経が衰弱していくのに気が付かず、別れてからもハンスに手紙すら送って来ない。

ハンスは母親の不在や子供時代の詰め込み教育のせいで、志を貫ける土台が形成されなかったし、友人のハイルナーや同級生との距離がうまく取れなかった。

小さな町から出てきた庶民のハンスは、一度転落すると滑りどめもなく、もどには戻れない。

悲惨な運命は町に戻ったハンスに自分の意志を持たせるきっかけすら与えようとはしない。頭痛に悩まされ勉強に追われ、断片的にしか平穏な時間が得られなかったハンスは、死ぬことによってやっと安らぎを得ることができた。

情緒を獲得しようとして、ハンスがこんな形で死んでしまうくらいなら、成績や出世だけを目論む非情な人間になってくれたほうが良かったと思った。

解説を読むと、ヘルマン・ヘッセ自身も神学校を退学した経験をもち、それをもとにこの小説を書いたということらしい。

筆者はハンスという「人間」を書こうとしたのではなく、ハンスを通して教育制度を批判したかったのかなと思った。

(おわり)

## 「よき理解者の不在」

ハンスの人生を不幸にした原因は何だったのか？彼から溢れ出る感性や生きる喜びを奪ったのは何だったのだろうか？

私が考えた2つの原因を以下に記述する。

① ハンスの才能は、町の教育者や牧師の目に留まり、彼の不幸は始まっていく。

彼らは自分達の満足の為にハンスを操り人形のように操作していく。父親も自分の誉れの為に賛同する。父を愛するハンスは、それに応えるため努力し、結果が出ると、純粹だった心は汚れ、野心と虚栄心が芽生えて高慢な人間に変わっていった。誠実な性格ゆえに、どこまでも頑張るハンス。彼の自由と意思は限りなく無くなっていく。

神学校でも同じ状況は続き精神と体は壊れていく。学校を辞めた後も偽善者の靴屋や魔性の女エンマが彼を自己満足のために不幸にする。彼が友として愛したハイルナーも、ハンスを愛してはいなかった。ハイルナーにとって、ハンスは気晴らしの一つであった。彼は自分の満足の為ハンスに近づいたのだ。

ただ、ハイルナーはハンスに自分のために生きることを教えてくれた存在ではあったが、ハンスにとってはこの教えはハイルナーへの自己犠牲に繋がっただけで、神学校で生活するハンスにはプラス方向にはならなかった。結局、ハンスは、周りの自己中心的な人達によって、不幸な人生を送る羽目になったのだと思う。

② しかし、①の原因以上に考えられるのは、ハンスに良き理解者がいなかったことだと思う。ハンスが望んでいる人生や彼の意思を尊重し理解を示す大人は、彼の周りに一人もいなかった。家に帰らされてから父親や期待していた人達に苦しんでいる時も、誰も手を差し伸べはしなかった。彼は優しく誠実で親思いだった。にもかかわらず、父親は死んでもまだ彼の気持ちが理解できなかった。余りにも悲しい。

そして、職人の誇りを体験から理解し、生きる喜びに向かおうとしたハンスを待っていた憂鬱。親思いで真面目なハンスが悩む憂鬱。そのために彼は死んでしまった。私は理解者がいなかった彼に深く同情する。

(おわり)

## 奪われた少年時代

この小説は田舎の自然の描写が繊細で美しく、まるできれいな水彩画をみているようだった。そしてそのみずみずしい景色の中に手脚のまだか細い少年ハンスが1人水遊びをする姿を思い描くと、彼はただの弱い子供にすぎなかったのだとやりきれない気持ちになった。

ハンスは自然を愛する魚釣りが大好きなどこにでもいる普通の少年だった。しかしなまじ頭が良かったせいで田舎で神童扱いされ本当は繊細で気弱な少年なのに無理に虚栄心を植え付けられ、精神が病むほど無理に勉強させられてしまった。神学校なんて落ちてしまって近所の友達と機械工として働いた方が幸せだったのだと思う。

おもいきり笑ったり、うさぎを飼ったり、釣りに行ったりすることは、子供時代の特権である。受験の役にたたないからといってこれらを禁止してしまったことが、ハンスの生きる道をさらに狭いものにしたのだと思う。

ハンスと父親は全く違う人生を歩み違う世界を見ている。親子であっても理解し合うのは難しい。普通の父親はお金を稼いで、教育の機会を子供にあたえるだけで精一杯なのだろう。

自分の意志をもっと持つべきだと大人はハンスに言うかもしれないが、大人の庇護にある10代の彼にとって教師や父親の存在は大きく生死の問題であったに違いない。

靴屋のフランクはハンスに言った。

「落第したって決して恥ではない。いくらできる者でもそういう目にあう。神様はひとつひとつの魂に特別なおぼしめしを持っておられて、ひとつひとつに独自の道を歩かせてくださるということをよく考えてもらいたい。」

これはヘッセ自身のメッセージではないかと思った。そして労働の喜びを感じ始めたハンスに機械工として歩む人生を与えず、残酷にも死なせてしまったのは、みんなが同じ考え方をするように規則で強要し、人と違う考え方をする者を排除することの危険性を強く読者に伝えたかったからだと思った。

(おわり)

## 「運命の車輪」

ヘッセの作品に出てくる主人公は軟弱で可憐な性格の少年の場合が多い。

高校生のころ、彼らに感情移入しながら甘ったるい慰めを感じた覚えがあるので、個人的に彼の作品には身に染みるような所が多々ある。

小学校から高校までのいわゆる義務教育の期間は、永遠に止まらない車輪のようにどうどう巡りを繰り返す。そこから跳ね返されるものも、車輪に押しつぶされるものも、辛うじて車輪にしがみ付いているものも、この目で沢山見てきた。

みな車輪に絡まっている以上、ただの操り人形にすぎなくなることを知っている。しかし、車輪から突き放されるのが怖くて、そこから逃れない。車輪の回る理屈をよく分かっていて、余裕に滑っているものだけがどや顔で落伍者らを見下している。でも結局みな車輪の上で危うくぶら下がっているだけなのである。

誰が車輪を回しているか、自分がついている車輪はどういう乗り物なのかが分からないままでは、永遠に車輪に翻弄されるばかりである。それを確かめるためには、一旦車輪から離れて、遠くから物事を眺めなければならない。しかし、みな慣性に飼いならされていて車輪から逃れなくなっているか、車輪があたえる居心地の良さにうっとりしているか、車輪の外の世界を怯えていて、結局ずっと車輪の支配を受けることになる。

ハンスは自分を苦しめる車輪から跳ね返され、惨めな姿のまま帰郷するに至る。神学を学び、教授や牧師になれるはずだった彼の運命は車輪から離れてのとも崩れてしまった。その後、彼は皮肉にも自分を苦しめた車輪そのものを手入れする作業に勤めるようになる。それは、彼の中で僅かに残っていた車輪への憧れや憎しみが彼をそう導いたのかもしれない。最後まで彼は「車輪」から完全に解放されることができなかったのである。

ハンスは最後に死を迎えることによって、はじめて真の自由と安息を味わう。車輪の意地悪も彼の最期だけはどうともできなかった。

それだけが救いだらうか。あるいは、ヘッセのいう車輪が輪廻のことを指しているのであれば、ハンスは永遠に車輪に翻弄されることを繰り返すかもしれない。悲しくてもそれが痛ましい真実かもしれない。

(おわり)

## 「もしかしてだけど 車輪の下ヴァージョン」

ドイツの自然豊かな街に容姿端麗で頭脳明晰な、父子家庭育ちの男の子がいたんだ。  
彼は父親と周りの期待を一身に受けて超難関の神学校の州試験を受けたんだ。  
もしかしてだけど、もしかしてだけど  
それってハンスの為じゃなく、親父の名誉の為なんじゃないの？

受験本番の口述試験、うまく答えられなくて絶対不合格だと思っていたのに、本人もびっくり 2 番の成績で合格したんだ。

もしかしてだけど、もしかしてだけど  
それまでの同級生をバカにし始めたんじゃないの？

神学校の寄宿舎に入って、個性的な同室者がいるけど、ハンスは黙々と勉強したんだ。  
もしかしてだけど、もしかしてだけど  
ここでもマウンティングが横行してるんじゃないの？

校長に依怙鼻息されたハンスだけど、ハイルナーと親友になり成績が下降の一途を辿ったんだ。  
もしかしてだけど、もしかしてだけど  
学校が育てたいのは何でも言う事を聞く子なんじゃないの？

腐ったミカンの扱い受けて、やる気をなくして心身壊して学校やめたハンスだけど、ある日早熟な女の子が現れ恋に落ちたんだ。

もしかしてだけど、もしかしてだけど  
ハンスはアンナに惚れちゃってるんじゃないの？  
もしかしてだけど、もしかしてだけど  
エンマはハンスを弄んでるんじゃないの？

父親の勧めで機械工になり、仕事の厳しさを知って週末。疲れていたけど仲間とビールを飲んだんだ。  
もしかしてだけど、もしかしてだけど  
心の中では惨めに感じてたんじゃないの？

日本政府のデータによると、日本の若者の死因 1 位は自殺らしい。

もしかしてだけど、もしかしてだけど  
若者が夢を持ってない社会になってるんじゃないの？

もしかしてだけど、もしかしてだけど

成果主義・同調圧力で疲れてるのは大人も同じじゃないの？

もしかしてだけど、もしかしてだけど  
多くの人が絶望に気づかない絶望状態なんじゃないの？

そういう事だろ！

(おわり)



## 『父親のちがい』

ハイルナーの父については、脱走騒ぎをうけて、「翌日、駆けつけてきた父親がハイルナーを連れて帰った」としか書かれていない。ハイルナーはその後、人生のいろいろな辛酸をなめながら「ひとかどの人」になったとあった。

ハイルナーの父は、熱心な信仰を持ち、厳格な人だったのか。それとも寛容な心の持ち主だったのか。私は寛容な心の持ち主だったと想像する。ハイルナーの様々な抵抗心は、紆余曲折ありながらも、放校になった後も自分で社会との帳尻を合わせる力をつけて、生きる原動力となったと推察するからだ。彼がその道を歩めたのは、父親が寛容だったからではないか。

一方、ハンスの父は、レールの上を走ることをハンスに強いた。ハンスが神学校を「休学」し、職人の道に入る軌道修正も、父親の苦悩はそう大きくない様子だった。職人というレールに乗れるならそれでもいい。それならそれであとの人生はハンスに任せておけばよかった。しかし、おかしなことに父は夜 9 時になっても帰ってこないハンスを鞭で待ち構えた。そして、その夜永遠に息子を失った。

子どもが大人になる通過儀礼があり、そこにその社会の文化や風習、宗教などがあいまって、子ども自身がどう乗り越えていくのかは、やっぱり親がどういう姿を見せているのかによるのかなあとってしまう。気が付くと、自分の親としての在り方を半分後悔する気持ちを抱えながらこの小説を読んでいた。

かわいい子には旅をさせよという。それができるかどうかは私にとって大きな試練だ。教えることは教えたなら、あとはなりゆきに任せる。自分で失敗を体験させる。親はひたすら背中を見せることに徹する。それは、子どもの生きる力を信じる覚悟がいるのだろう。なのにいつまでもハンスの父タイプから抜け出せない自分を責める私がいる。人は、自分の弱みがむき出しにならないと、打たれる杭も出せない。ならば、今の私にできることは、せめて杭を出し、打たれる覚悟を持つことなのかもしれないと思い、親としての弱さを今回の読書感想文のテーマとした。

子どもの頃に自分が味わった辛酸をちゃんと我が子にも経験させることが親の大事な務めと思いながらも、つい過保護にしてしまう。毎日のように子どもの対人トラブルが重なれば、もっと経験値を積み打たれ強くなっていいように思えるのだが。なかなかハイルナーの父にはなれない。

(おわり)

belouga さんのブログです。過去のコラムなども掲載されています。ぜひご覧ください。

『belouga のつれづれ』 <http://ameblo.jp/clearmandarin/>

## 「帝国と教育」

(引用はじめ)

そしてうたい終わったか終らないうちに、何かが、かれの心の奥底で、きりりと痛んだ。そしておぼろげな観念と追憶、羞恥と自責との、にごった流れが、かれのうちにおちかかってきた。 P226

(引用おわり)

材木屋の次男だった『赤と黒』のジュリアン・ソレルも神学校から出世の糸口をつかもうとした。旧約聖書をヘブライ語、新約聖書をギリシア語で読むようなことが、なぜ庶民を、出世させるのか？ 森鷗外の小説『かのように』ではないが、国家というのは『かのように』で出来上がっている。

親や学校の先生の『敷いたレール』という言葉がある。一流大学に入って有名上場企業に入ったり、国家試験に合格して官庁に入ったりしていく。これが敷かれたレールだ。近代国家は、複雑なレールで秩序立てられた、『かのように』のシステムを支える有用な人材を選抜して育成している。

ハンス・ガイベンラアもその敷かれたレールを進んだ。そのおかげで、彼の多感な魂は、車輪の下で無残にも引きちぎられた。神学校の寮の『ヘラス』(古代ギリシアの意味)から、三人がドロップ・アウトする。ヒンディンガアとあだ名された少年は、頓死し、ハイルナアは退学させられ、ハンスは精神を病んで休学となった。

ジュリアン・ソレルの通っていた神学校にも、頭がおかしくなってしまう神学生の様子が描かれていた。信仰もないのに、語学を詰め込まされ、聖書や古典文学を強いられる。この教育システムは、やがて帝国主義を露骨にする近代国家の政治的手段のためにある。その証拠に、軍隊も同じように、子供を教育し、近代国家の軍制を支える人材を発掘育成している。

ギリシア時代は、教育は一部特権階級のなぐさみであり、また、支配の道具であった。ときが経て、教育は、国民すべての義務となった。さらには、帝国主義を正当化する手段となった。

ハンスの死は帝国主義の必然的な帰結だ。ハンスのように、自分を責めて自殺のように死ぬ学生がいるのなら、日本の現代教育もいまだに形を変えた帝国主義(覇権主義という)の産物なのだ。

(おわり)

『信州読書会』メルマガ登録はこちらから [http://bookclub.tokyo/?page\\_id=714](http://bookclub.tokyo/?page_id=714)  
今後のツイキャス読書会の予定です。 [http://bookclub.tokyo/?page\\_id=2343](http://bookclub.tokyo/?page_id=2343)